

組織現勢（2月1日現在）

組合員数	20,254人
出資口数	96,045口
12・1月の新規加入	186人
12・1月の増資口数	1,376口

No. 390 再生紙を使用しています。

城南の保健

発行所
城南保健生活協同組合
本部事務局 大田区大森東4-6-15-101
TEL (3762) 0266
振込銀行 さわやか信用金庫大森支店
口座(普) 0469459
発行 「城南の保健」編集委員会
毎月1回発行・定価1部 30円



春と秋に健康バスハイクを行っています

2015年度 仲間増やし 目標達成(4年連続)に向けて挑戦中です

ご家族やお友だちで城南保健生協に
加入していない方のご紹介をお願いします。

- 毎年700人の仲間（組合員）を増やす目標を掲げています。
- 3年連続で達成し、今年度4年連続に挑戦中です。
- 2016年2月10日現在、482人が増えました。
- 年間目標700人－482人＝残り218人です。

城南保健生協の加入は、1口1000円からです。月々の会費はありません。脱会される時は全額返金されます。皆さまからお預かりした出資金は、訪問介護事業運営や、グループホームの運営に役立っています。

みんなの力で
目標を達成
させましょう



健康づくり・まちづくりをすすめます

春の健康バスハイクのご案内

「世界遺産 富岡製糸場の旅」

今回の旅は、群馬県。平成26年に世界遺産に登録された富岡製糸場の旅です。明治5年、生糸の品質向上と増産のために建てられた工場で、操業当初の主要な施設がそのまま現存しています。歴史ある水澤観音も散策します。

【日にち】 4月24日(日) 雨天決行

【参加費】 大人 7,500円

子ども(小学生以下) 7,000円

子ども(小学生未満) 3,500円
(座席を必要としない方)

昼食付き(水澤うどん)です!

詳しくは折り込みチラシか生協本部まで



明治5年操業の富岡製糸場

保険証1枚で、いつでもどこでも医療機関を受診できるのが「皆保険」制度ですが、国民健康保険料を払うことができない病院にかかることをあきらめたり、治療費の心配から受診を我慢して死に至る事態も広がっています。

『サンデー毎日』2016年

保険料を払いたくても払えない

国民健康保険の滞納者は全国で約360万世帯(2014年度)。全加入世帯全体の約17%。家族3人所得350万円、年間所得60万円の保険料や、年間所得250万円の4人家族で年45

万円の保険料の自治体もあります。国民健康保険は稼働所得のない赤ちゃんも保険料を払っています。

社会保障制度の改善のために声をあげていきましょう!!

国民健康保険料を払えない 治療費の心配から受診を我慢

最大の要因は国庫負担の引き下げ

国は1984年、それまで約5割だった国庫負担率を24・8%(2011年度)にまで半減しました。所得に占める1人あたりの保険料負担は9・9%と大企業の健保組合の倍近い状況です。

正規の保険証をもっていない病院の窓口負担が家計を圧迫するため 受診を諦める人も

生きていく賃金や年金が保障されず、一方で社会保障の削減、負担増や消費税増税が家計を圧迫している背景があります。

大田病院は2009年から

無料低額診療事業を実施

無料低額診療事業は、通常では3割(70歳未満)かかる医療

費の自己負担分を、経済力に応じて減額、または免除する制度です。世帯収入が生活保護基準と同等か1・3倍までなら全額免除に。また1・3倍から1・5倍までなら半額になります。まずは大田病院医療相談室にご相談ください。03-3762-8421(代表)。

今後も社会保障改悪の検討が おこなわれています

安倍内閣は昨年末、医療サービスにのびる公定価格である診療報酬を事実上1・03%引き下げることを決めました。社会保障費を毎年2200億円削減し、医療崩壊を招いた小泉構造改革路線が復活したかたちです。今ある制度を知って、権利として活用していく。声をあげていきましょう。

ご協力をお願いします

「戦争法の廃止を求める 統一署名」

戦争させない・9条壊すな!総がかり行動実行委員会と呼びかけで、全国で2000万人を目標に取り組んでいます。【城南の保健1・2月合併号】

に同封した署名用紙や城南福祉医療協会の各診療所や城南医薬保健協働の各薬局にある署名用紙へ署名をお願いいたします。

腹八分

仮に彼をK氏と呼ぶ。大正13年の生まれ。生涯最後の数年を生まれ故郷のグループホームで過ごしたけれど、おたやかに死を迎えた。93歳であった。K氏は山梨県の中山間地の農家の三男として生を受ける。目立つ存在ではなかったけれど、小学生の頃から百姓の手伝いをし、家業を助ける少年であった。それは当時の農村の子どもにとって一般的な生活であった▼やがて小学校卒業。青年学校に通いながら家業を手伝っていたK氏に転機が訪れる。昭和10年代の半ばを迎えていた日本は、中国戦線において、ますます泥沼化を深めていた。国策として少年をも事実上戦地へ赴かせたのだ。K氏は村役場や青年学校の教師の言葉に従い渡満。その名も青少年満蒙開拓義勇軍。ソ連との国境に近い寒冷地であり、軍隊並みの厳しい訓練の毎日であったけれど、実戦に遭遇することはなく、K氏の人生にとって最も思い出深い青春の時期であった▼やがてK氏も現地に集結、関東軍に入隊。国民党軍、八路軍との戦闘。現地調達という名の略奪。K氏はこの軍隊経験を多く語ることはなかった。やがてソ連の参戦。それ以前対ソ戦はないと判断していた日本軍部の方針で、関東軍の多くの兵士が南方に送られて無惨な死を遂げた。K氏は敗戦とともにシベリアに抑留。それでも仲間の多くを見送りながらも復員。国家に翻弄された青春であった。K氏と同じ時代を生きた世代の戦争による死は、敵との戦闘よりも餓死が圧倒的に多い。国家が国民のいのちを奪ったのだ。